

[19] Crossover : 日本語教育の留学生

<https://doi.org/10.15017/19355>

出版情報 : Crossover. 19, pp.1-35, 2006-01. 九州大学大学院比較社会文化学府
バージョン :
権利関係 :

学府長就任のご挨拶

根井 豊

(比較社会文化学府長)



人間、よわいを重ねると思いもかけない予定外のことを体験せざるをえなくなることがあるものですね。今年の4月には末の子も大学のために家を離れ、家の中も静かになり、また自分が卒業論文や修士論文を、暗闇の中を手探りで進むように必死になって取り組んでいた頃を思い出しながら、心中ひそかに期することもある、今後は大学でも家でも「窓際」で静かに本を読みながら過ごそうと考えていました。そのように時間も流れ始めていたのですが、7月1日の学府長就任の日に、それがぴたりと停止してしまいました。或いはそれは選挙が行われた6月の教授会の日であったというのが正確なところかも知れません。なるべき人がご病気や、やむをえない事情で学府長にならずに、代打の代打のそのまた代打というようなかたちで、しかし誰かがバッターボックスに立たなければゲームは進行しないという状況で、最早断るすべもなく、しかも各種委員会の長もやったことのない自分に務まるのだろうかという不安のなかでの就任でした。心の中では大声で「助けてくれー」と叫びながら、また実際、学府長経験の先生がたや、なるべき人だった先生に助言をいただきながら、腹を括ったわけです。代打の代打の…バッターにホームランが期待されているわけではなし、逆に気が楽ではないかと自分に言い聞かせて。

個人的事情はともあれ、また私的な時間は停止したままでも、事態は進行し、はや6ヶ月が経過しようとしています。あの教授会の日から、まず手を着けたことは、そもそもこの比文はどのような先生と学生から構成されているのかを確認することでした。普段はぼんやりと眼を通すだけだった比文の案内誌「越境する文化、共振する世界」の教員紹介のページをじっくりと見て、この比文が個性ゆたかな人材をそろえていることを再確認をして、改めて先生方に対して敬意のような気持ちが生じてきました。それは学生の皆さんに対しても同様で、広報誌「クロスオーバー」に掲載されている、修士論文や博士論文の題目一覧や、院生の活動報告に眼を通すと、彼らが、人生の生のかたちを確立していこうとする大切な時期をそれぞれの仕方でも真摯に過ごしていることが伝わってきます。これらのことは大学院としては当然のことではあります、学府長の仕事として、比文の構成メンバーの教育・研究環境を維持改善することが第一の仕事であることを確認したわけです。

教育・研究環境の維持改善にも様々な側面があるでしょう。個々のメンバーが各々のポテンシャルとパフォーマンスの度合いを高めようようなバックアップ体制を整えることから始まって、組織として、個々のメンバーが有している力が拡散したり妨げあったりすることなく、最大限の合力を出力しうるように全体を編成することにまで及びます。とりわけ組織としての特長を明確に提示することは喫緊の課題となります。研究科から学府への変化はあったものの、一貫して「比較社会文化」を標榜しながら設立以来10数年が経過して、またその名で学位を授与してきたわけですが、まだ「比較社会文化学」なるものが十分に世の認知を受けているわけではありません。無理に、「比較社会文化学」なるものを実体化する必要も、また他の諸学との差異を誇示する必要があるとも思われませんが、少なくとも、各自がそれぞれに、権威にとらわれることなく自由かつ根源的に、所与を凌駕しつつ、研究の方法と対象領域を開発しながらの創造的な活動と前進こそが、比文のよって立つところであることを忘れてはならないでしょう。この創造的な活力を保持している限り、おのずとこの学府とその学の営みが認知されることになることを確信しています。

○○○ 学府長メッセージ

研究の面と並んで、或いはそれと一体となって大切な面は、教員と学生、学生と学生、教員と教員とのあいだで、相互の敬意に基づく研究教育のコミュニティを形成することであると思



能古島の休日

われます。研究の営みは得てして孤立状態へ陥りがちです。そして孤へと沈潜することが研究の深化のために必要な一つの契機であることは否定しえないことです。しかし単なる知識のひけらかしではない、率直な疑問の提示と議論の展開が探求を深化進展させるもう一つの重要な契機であることも否定しえないことです。とりわけ多くの留学生を迎えている比文においては、そして留学生だけではなく孤立状態へ陥りがちな現在の学生諸君のこと、さらには大学教員のことを思えば、親密で誠実な研究・教育のコミュニティの形成が何よりも必要だと思われま

す。これらの事柄は、おおかたは前学府長の高田先生によってその糸口はすでにつくられています。私はただそれを継承していくばかりです。ただしそのためにも皆さんのおおきのご助力を必要としています。ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。



九州大学大学院 比較社会文化学府・研究院

Graduate School of Social and Cultural Studies



貴重な場所

秋吉 收^{しゅう}

(国際言語文化講座)

2005年10月に六本松に赴任し、国際社会文化専攻、国際言語文化講座の担当をさせて頂くことになりました。よろしくお願いいたします。

専攻は中国近代文学で、魯迅などを中心に研究しています。また、近代における中国や台湾と日本の文学交流にも興味があり、例えば最近是比较文学の視点から「魯迅と与謝野晶子」「魯迅『野草』における芥川龍之介」「『詩』への想い—芥川と魯迅—」、また台湾を視座とした「植民地台湾を描く視点—佐藤春夫『霧社』と頼和「南国哀歌」」「“台湾の魯迅”頼和にみる大陸新文学の影響」などの文章を書きました。近代文学においても中国と日本の関係は非常に強いものがありますが、中国や台湾を研究しながら、実は自分探しの旅をしていると気付かされることもしばしばです。

古代より日本は長い間、高度な中国文化に憧れ、模倣してきました。しかし近代に至って情勢は大きく変化します。明治維新によって、模倣の対象を中国から欧米諸国へと鞍替えした日本は、アジアの中で真っ先に近代化を成し遂げ、中国や朝鮮など周辺諸国に対して蔑視の眼差しを向け始めます。反対に、中国からの留学生が日清戦争後の1896年に初めて日本に派遣され、1906年には約一万人に達しています。その中に若い魯迅や、九大に留学した郭沫若らが含まれていました。日中関係はここに大きく転回したのです。ただ、彼らが日本に留学した目的は決して日本の文化を学ぶことではなく、欧米の進んだ文化を「安近短」の日本から吸収しようとしたのでした。四千(五千?)年の悠久の歴史と文化を有する中国から見れば、弱小なる朝貢国であった日本から学ぶなどプライドが許さなかったことは想像に難くありません。魯迅研究の分野でも、近代中国の最も偉大な文学者魯迅は基本的に日本文学から直接の影響を受けてはいないというのが、通説でした。やはり著名な文学者となった弟の周作人が「魯迅は留学」当時、日本文学に対しては少しも注意しなかった」と言明していることもその説を裏打ちします。しかし最近の研究で、魯迅を始めとする日本留学生たちは、

日本は手段に過ぎないと強く意識しながらも、実際にはそこで生活し日本の文化や人々と交流する中で、日本そのものの影響を確実に受けていたことが明らかになってきました。魯迅にしても、日本文学に無関心を装いながら、同時代日本人作家の作品を下敷きにして創作や評論活動を行ったりと、実際には熱い眼差しを送っていたのです。魯迅の言説をひもとけば随所に日本が意識されていることは自明です。そして、その魯迅の文学は、日本の知識人たちの強い共感を呼び、近現代日本の文学、思想へ多大な影響を与えたことは周知の通りです。

私の現在の関心は、こうした近現代における文学交流について、いまだ明らかになっていない事実を掘り起こし跡付けていくことにあります。また、日本において中国近代文学がどのように読まれてきたか、いま一度辿り直したいとも考えています。

近年、日本と中国やアジアの国々の関係は政治的影響から決して良好なものとは言えない状況です。上海で出会ったあるガイドの若者が口にした「絶対不買日貨!」という激しい言葉は今でも耳に残っています。でも彼は「日本人の本当の気持ちを知りたい」とも言っていました。比文の大学院には多くの留学生が学んでいます。日本人学生、教員の私たち、皆が本音で語り合い、研究という苦しみ楽しみを共有できる、ここは本当に貴重な場所だと感じています。

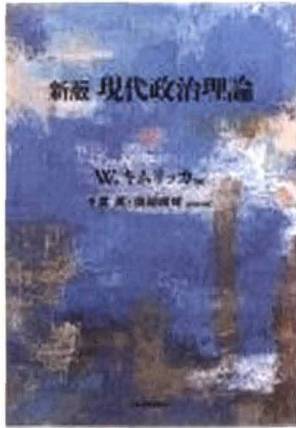


キムリック『新版 現代政治理論』

千葉眞・岡崎晴輝訳者代表

岡崎 晴輝

(比較政治講座)



(日本経済評論社 2005年) 4725円(税込)

この度、比較社会文化学府の教員2名(岡崎晴輝、施光恒)、大学院生2名(牧野正義、前田恵美)を含むメンバーで、キムリック『新版 現代政治理論』(日本経済評論社)を翻訳・公刊しました。キムリックは、この分野を牽引するカナダの政治理論家です。本書は初版公刊(1990年)後、英語圏における政治理論の標準的教科書としての地位を獲得してきました。また、ドイツ語やフランス語はいうまでもなく、世界各国語に翻訳されてきました。日本でも、初版の翻訳・公刊(2002年)後、好評を博しているようです。教科書といっても、かなりレベルの高いものに仕上がっており、学部生用の教科書としては少し難解であるかもしれません。

本書の初版を翻訳した際、私は、日本の政治理論研究を活性化させたい、という動機を抱いていました。私が大学院生だった1990年代には、政治理論を専攻する者は決して多くありませんでした。その頃、政治理論専攻を名乗る者は少なかったはずですが、一方では、『レヴァイアサン』グループを中心にして、科学としての「政治科学」が隆盛を極めていました。他方、規範理論に関心を寄せる人々は、スキナーの方法論の影響もあり、歴史としての「政治思想史」に専念していました。しかし世界では、東欧革命(1989年)、天安門事件(1989年)、ドイツ統一(1990年)、湾岸戦争(1991年)、ソ連崩壊(1991年)といった歴史的大事件が起こっていました。国内に目を移せば、55年体制の崩壊(1993年)、オウム真理教による地下鉄サリン事

件(1995年)といった衝撃的な出来事が相次いでいました。そうしたなか、政治科学や政治思想史にとどまることなく、アクチュアルな政治理論を築いていかなければ、という衝動にも似た気持ちを抑えることができませんでした。

もちろん、政治科学や政治思想史の意義は重々承知しているつもりですし、それらを否定するつもりはありません。しかし残念なことに、「それで?」(So what?)という研究が少なくないように感じたのです。政治科学は、当たり前のことを、もっともらしく証明しているにすぎないのではないかと。政治思想史も、重箱の隅をほじくるような研究に陥っているのではないかと。激動する現代政治に応答する、アクチュアルな政治理論が必要なのではないかと。こうした問題関心を抱いていた私は、ロールズ以降の現代政治理論の到達点を示した本書を翻訳することで、日本における政治理論研究の活性化に寄与できれば、と期待したのでした。

*

翻訳作業を通じて、私は改めて、本書のすばらしさを実感しました。本書は、英語圏の膨大な研究成果を踏まえつつ、現代政治理論の到達点を整理しているのですが、単なる整理にとどまりません。そこでは、キムリック自身の鋭い思考が遺憾なく発揮されているのです。

幾つか議論を紹介しましょう。たとえばマルクス主義に関して、次のような根本的な批判が展開されています。マルクス主義者でなくても、「疎外されていない労働」という理念に共感する人は多いでしょう。しかしキムリックは、労働以外の価値を考慮に入れると、「疎外された労働」よりも「疎外されていない労働」のほうが優れているとはいえない、と問題提起します。「疎外されていない労働」では、経営に参加するために時間を割かなければなりません。しかしこのことは、労働以外のものに価値を置く人々の自由を脅かしかねません。ここに、テニスが好きな人がいるとします。その人は、テニスを楽しむ時間を捻出するために、経営に参加する必要のない「疎外された労働」に従事したがるかもしれません。キムリックに言わせれば、こうした理由で「疎外された労働」を好んだとしても、その人は決して病的ではないというのです。多くの人は、こうした議論に同意す

るのではないのでしょうか。ちなみに、中国人留学生によれば、マルクス主義の章も中国語版で訳出されているとのこと（『当代政治哲学』）。

新版では、リベラル・ナショナリズムの議論が加筆されています。国民国家の偏狭さを感じ、コスモポリタニズムに親近感を寄せる人も多いでしょう。しかし、キムリッカは、リベラル・ナショナリズムの立場からコスモポリタニズムに疑問を呈します。たとえばEU議会の権限が拡大したとします。デンマーク人がEU議会の決定を気に入らなかった場合、他のヨーロッパの人々、たとえばイタリア人とどの場所で、どの言語で討論すればよいのでしょうか。現実には、ヨーロッパ横断的討論というのは実現困難であり、それを実現しようとするれば、かえってデモクラシーを後退させてしまうかもしれません。このことを考えれば、デモクラシーを機能させるためには、国民国家の枠組みは依然として重要であり、ナショナリズムからコスモポリタニズムへ、と安易に捉えることはできないというのです。

こういう具合に、実に刺激的な議論が目白押しなのです。

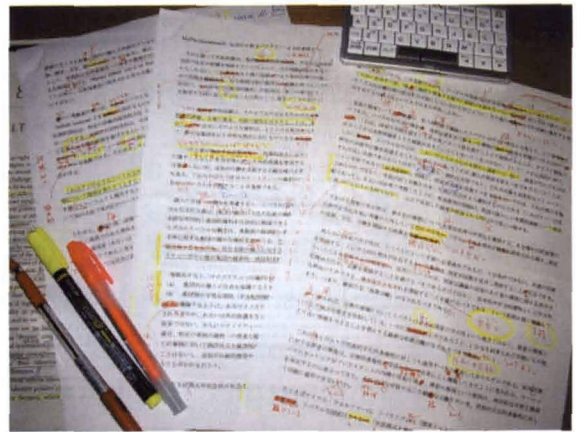
*

この辺で、少し翻訳の裏話でもしましょうか。最初に直面したのは、そもそも翻訳とは何か、という根本問題をめぐる見解の相違でした。一つの考え方は、原文に忠実に、構文や単語を日本語に置き換えていく、というものです。もう一つは、「キムリッカが日本語も使いこなせるバイリンガルであったなら、どのような日本語を書くだろうか」とイメージしつつ、日本語を作成していく、という考え方です（川本皓嗣・井上健編『翻訳の方法』東京大学出版会を参照）。今はなき新宿の談話室「滝沢」で激しい議論を戦わせたことが、昨日のこのように思い出されます。結局、出版社の意向もあり、後者の方針を採用しました。それで正解だったと思います。もっとも、私達の力不足のせいで、

自然な日本語になったかどうか、心もとありません。しかし、ある程度は読みやすい日本語になったのではないかと自負しています。

翻訳を進めるなかで、別の問題にも直面しました。初版は7名で、新版は9名で翻訳したため、訳者間の調整に予想以上に手間取ることになったのです。キムリッカの単著なわけですから、基本用語を統一し、文体もある程度統一する必要があります。途中で一つの基本用語の訳語を変更すると、別の章でも、それに合わせて訳語を変更しなければなりません。この骨の折れる仕事を引き受けたのが私でした。びっしりと朱を入れた草稿を、何度も訳者に送りかえすことになりました（写真を参照）。訳者の一人によれば、睡眠中、赤線と黄線の悪夢にうなされたことも、一度や二度ではなかったようです。すまないことをしました m(-_-)m

それはともかく、本書は、政治学を専攻する方のみならず、広く社会科学を専攻する方にとっても有益な書物だと思います。ぜひ手にとってみてください。刺激的であること、間違いありません。



特集：日本語教育の留学生



日本語教育総合演習風景

比文では、年々全在学者数に占める留学生の割合が増加する傾向にあると言われている。ちなみに全在籍者数281名のうち、留学生数は84名にのぼる(2005年11月末現在)。つまり、留学生が全体の3割近い比率を占めていることになる。

では、比文の中でも留学生の占める比率が高いと言われる日本語教育講座ではどうだろうか。表1に見られるように、講座全体で見ると38名中26名と、留学生の占める割合が3分の2を超えている。さらに、博士課程在籍の留学生32名のうち、半数を超える19名が日本語教育講座に在籍していることがわかった。

こうした留学生数の増加に伴い、留学生の生活・就学上のサポートが重要視されるようになり、今年度4月から留学生相談室(担当者：松永)も設置されている。ただし、相談室の利用状況から見て、新入生以外の在学

生には相談室がどの程度認知されているのか担当者としては疑問も感じている。留学生数の増加傾向が今後も続くことを考えれば、留学生が抱えている問題をさらに広範に捉え、それに対処していく方策を考えることは必要不可欠である。

そこで、『CROSSOVER』への寄稿依頼を機に、日本語教育講座の留学生が現在抱えている問題を率直に語ってもらおうと座談会の場を設けることにした。そこから、今後の留学生へのサポートとして何を考えていくべきか、探ってみることにしたい。

また、日本語教育講座の留学生を代表して博士課程在学中のモニカ・ハムチュック氏、ク・モハマド・ナビル氏、趙海城氏、第1期生の許明子氏にも寄稿をお願いし、それぞれの問題関心や近況を伝えていただくことにした。

本特集全体の構成としては以下、留学生座談会についての報告、各氏の寄稿の順にお届けする。



日本語教育講座の留学生たちと

表1 日本語教育講座の在学者数(但し、研究生を除く):数字は人数、松永の調査による(2005年11月末現在)

	修士1年	修士2年	博士1年	博士2年	博士3年以上	計
留学生	7	5	3	4	7	26
日本人学生	0	5	1	1	5	12
計	7	10	4	5	12	38

留学生座談会

松永典子

(日本語教育講座)

テーマ：比文での研究生生活

参加者：日本語教育講座修士1年留学生5名 (M1～M5) 進行 (S)
 (注： / = 発話の区切れ。 . . . = 会話進行中の一時停止。 * = 複数の発話。)

①机の問題

留学生の声1

フリースペースの机がもっとあると、研究効率もあがり、嬉しいのだけど。

(略) ~~~~~

S: 修士部屋で一番よく勉強される方はどなたですか。
 M: (笑い) …修士部屋で? …
 S: あんまり勉強しない?
 M1: みんな修士部屋で勉強しないかな。
 M1: 他のところで / 授業のない教室で勉強するかな。あと、図書館で。
 S: あ、そうなんですか。やっぱり修士部屋は自分の机がひとつだけ(と)決まってないところが勉強しにくい?
 M2: はい、4人でひとつの机だから、めんどくさいもんね。
 S: あ～、めんどくさいっていうのが /
 M3: はい、時間が決まっていて、空いてる時間が合わないとか制限があるので。
 S: じゃ、皆さんはほとんど自分の家で勉強するほうが多い?
 M: (笑い) う～ん、半々くらいかな。

(中略)
 S: そうすると、大学での研究生生活というのは十分満足していない感じですか。
 M4: まあ、机があればいいかなと /
 S: ああ、机があれば / それが一番困っていることですか。
 M4: 固定される場合がありますと、正直に言って勉強や生活にいろいろと支障があって、それであつたらいいなという発想が /
 S: じゃあ、固定されていないフリースペースの机がもっとあって、自分が空いてる時間にはそこを利用できるようだったら、もうちょっと /
 M4: うれしいです。(笑い) …(略)

②研究資料の問題

留学生の声2

①論文資料の使い勝手が悪い。箱崎の雑誌が六本松からも文献複写依頼ができると助かるのに。
 ②資料は箱崎のほうが圧倒的に多いので、六本松図書館の資料をさらに充実してほしい。

(略) ~~~~~

M3: 図書館で自分の論文を探したら、箱崎の文系図書館にいつもあるから、そこまで行かなきゃ / 本はこちらで申し込みもできるんですけど、雑誌の場合です。
 S: あ～、文学部の図書館にあつたりするものが多い?
 M: はい、多いです。
 M3: 50年代、60年代の本は文学部が多いです。
 S: ちょっと古いほうの本は文学部?
 M3: はい、文学部が多いです。でも、新しい研究の本、たとえば、

ここ数年の2000年以降の本は少ないかな。
 M3: あと～、資料は「研究室貸出」と書いてあって、その研究室がどこかわからないです。
 (略) (*この件については、図書館で所在が確認でき、貸出も可能なことを相互に確認。)
 M3: 論文ですね / 他のところに九大にない論文だったら文献依頼ができますよね。図書館でそういう形ができるんですけど。でも、箱崎にある論文とか、それができないと言われて

○○○ 特集:日本語教育の留学生

て/何回か頼んだことがあるんですけど、それができないと言われて/そうじゃないと他のところからの申し込みもできるんですけど、やっぱりお金も高いし、もし同じ学内の論文の依頼もできれば/校内便でそれを送ってもらって論文のコピーのお金だけを払うと楽になると思ってるんで。

S: あ、文学部の雑誌とかの論文のコピーができないっていうこと?

M3: いえ、自分で行かないとできない/自分で探さなきゃ。

S: あっ、自分で行かないとできないって/それはある程度仕方ないかもしれないですね/学内だから。

M3: ちょっとどうしてって/他の大学ができて、でも校内がどうしてできないかなって…。

S: 指導教員に頼むということも考えられるでしょうけど、でも自分の研究のことでいちいち先生にというわけにもいかないでしょうから、基本的には自分が動くしかないとは思いますが。

M3: もしそれができたら/

S: あ、できたらね。

M3: (笑い) できたらいいと思います。……(略)

M5: 自分がHPで探した図書館の文献がいくつかあって、いつもまとめて一日の時間をかけて箱崎に行くんですけど/皆さんと同じように六本松で資料を貸し出ししたら、直接研究室でコピーできるんですけど/しかも無料で。でも箱崎に行ったら研究室はないんで全部自分のお金で/(笑い)この前は1,000円くらいかかっちゃったんですよ。

S: ああ、そんなにかかっちゃったんですか。

M5: ええ、何かやっぱり不便/

S: ああ、図書館が別々でしかも離れているっていうのは/

M3: しかも、向こうのほうが多いですね。(M:*笑い)

S: あっ、そう/(M:*向こうのほうが多い)

M3: たまには行くのは大丈夫だけど。(M:*わかる、わかる)

M5: たまにHPで検索して「この本が六本松にあるんだ」/とてもラッキーだと/(笑い)

M2: ほとんど向こうだから。

S: そうねー。やっぱり文学部のほうが歴史があるので、その分資料の蓄積もあるっていうのが関係してるんでしょう。そうですね。やはり、皆さん資料が一番困っている/

M: *はい、困っている…

③奨学金の問題

留学生の声3

奨学金が多くての学生にいきわたるようにあれば、もちろん嬉しい

S: その他の点では何かありますか。…(M:沈黙)奨学金がもっと多かったらいいとか。

M3: 多いとかじゃなく、今みんなもらってない/

S: ああ、みんなもらってない/(M:*爆笑)奨学金をもっと増やしてほしい?(M:*笑い)2年生はどなたかもらってらっし

やいますか。

M: 2年生は3人?…うん/

(省略:2年生は日本人の学生が多いが、1年生は日本人の学生が少ないという話題へ)

④日本人学生との研究交流

留学生の声4

M1は留学生だけなので、授業に日本人学生がいたほうが良い

S: そうですね。M1は日本人の学生がいないですけど、その点は皆さんにとってどうなんですか。

M2: どうですか?(*笑い)

M1: 残念。日本語のチェックとか母国語のニュアンスとか、留学生としては外国人として日本語を見たら、そういうニュアンスとか感覚が出ないんで。それでこのことばとか日本人にとってどういう感覚かとか。それはちょっと先輩も忙しいし、授業の時も時々先生も母国語チェックをしたいけど、日本

人の学生がいない時はちょっと困ってます。

M5: (その問題については)修土部屋でも他の日本人の方とコミュニケーションできますし、長い間で習得できたらいいんじゃないかと思います。

M1: でも、それは日本だからどこでも日本人がいますので(M:*爆笑)/もちろんやっぱり授業の時には日本人の学生がいたらいいと思います。

(省略：生活面の話題へ) ~~~~~

⑤留学生寮の問題

留学生の声5

ずっと住める留学生の寮があったらいいな。

M3:生活のほうは、留学生の寮があったらいいなど。

S:留学生の寮／あ～。

M3:前は初めて日本に来た時は留学生会館に住んでいて、でもそこは1年間しか住めないのので／で／そこから出て自分でアパートとか探さなきゃいけないので／で／他の大学とか何か友達が日本の他の大学にいて、留学生の寮が

ついているって言われたけど。

(*神戸大学の例、六本松の国際交流会館の募集人数が少ない話などから期間限定でなく家賃も安い住居を希望する話題で盛り上がる)



日本語教育講座の修士1年

⑥全体懇親会の希望

留学生の声6

博士課程の学生(特に会うチャンスのない2・3年生)とも交流の機会をもちたい。

(省略：*日本語教育講座の交流、全体の交流の話題へ) ~~~~~

M1:こないだ4月の時の歓迎会もみんな、一緒に行きました。

S:そうですね、新入生の懇親会は全体でしたんですけど、それ以外は／

M1:普通の懇親会がありません／

S:普通の懇親会がありませんですね。

M4:何と云えばいいんでしょう。日本語講座の場合は今交流があるのはM1とM2ぐらいで、もっと上の博士の方々にはあまり会うチャンスがない／でもみんな忙しいから(笑い)。

⑦箱崎との情報較差の問題

留学生の声7

①六本松キャンパスは箱崎と比べて情報が少なく、情報の速度も遅いので改善を!!
②国際交流活動に参加するチャンスを!!

M3:あとは、ここの情報は箱崎より少ない。

S:情報?どういう情報ですか。

M3:いろんな面。たとえば、大使館のパーティーの出席者を探すと、全然知らなかった。

(M:*全然知らない)全部交流係のほうで選んで参加してた／

M4:このキャンパスは独立しているみたいで(M:*そ～)、箱崎と離れているみたいな感じ(M:*そうですね～)。

M3:だから、全然知らなかったです。ホームスティとかも／

M1:交流もないし、国際交流活動に参加するチャンスがない。

M2:たぶん箱崎のほうで募集してて、ここはあまりない。

S:あ～それは留学生の掲示板にも出てないんですか。

M1:掲示板?出てないです。

(M:*見たことがないです。)こないだ寮(国際交流会館)でホームスティの募集を見て、こちらの大学院係に聞いたら

「ない」って言われて／「えっ、どうして?寮のところにあつたのにどうしてここがない」って／

(*続いて、留学生関連の行事申し込みの掲示期限が極端

に短い、大学院係の前の掲示板の情報が少ないという指摘があった。)~~~~~(以下省略)

座談会を終えての考察

以上の内容をもとに日本語教育講座の留学生が現在抱えている問題について、今後どのような方向性が考えられるか、大きく3つに分け、整理してみた。

I これから関係者の協力を得ながら改善できる点

- ①六本松図書館の資料を充実させていく(将来的にはキャンパスが統合することでも改善の見通しはあるかもしれない)
- ②箱崎キャンパスとの情報較差を少なくする
- ③博士課程の学生との研究交流、比文全体での交流・懇親の機会を設ける

II 留学生だけの問題としてではなく、今後、全体的問題として考えていくべき点

机の配分の問題

III 早急には解決は困難だが、留学生の抱える問題として認識しておく必要がある点

- ①奨学金の増設
- ②留学生寮の設置

このように早急に改善の方向性を探ることのできる問題とできない問題があると考えられる。ただし、これらは留学生が抱える問題の一端でしかないことも事実であろう。留学生相談室担当者としては、これらをひとつの参考資料として比文の留学生の研究生生活の充実がはかれるよう今後ともサポートに努めていきたい。それには、日本人学生の側にも意見や協力を求めていくことも必要だと考えている。関係する教職員の皆様方にもより一層のご尽力・ご協力をお願いしたい所存である。

人間の普遍と特殊性

—— 私が考えている文化の意味 ——

ク モハマド ナビル

(日本語教育講座)

最初の来日は、1990年のJICAの「21世紀のフレンドシップ・プログラム」(THE FRIENDSHIP PROGRAM FOR THE 21st CENTURY)だった。その時「私はムスリムです」「豚肉はだめです」「お酒はだめです」という簡単な会話を自己紹介以外に覚え、プログラムに参加した人々やホーム・ステイの家族に伝えた。簡単な文章であるが、私は自文化を尊重して相手の文化との緊張を作るよりむしろ、自文化に属する自分を説明したいと思ったのである。つまり、より広い範囲・意味での文化は自分は何者かという説明に過ぎない。文化の古典的な定義として、タイラー(Tylor, E.B)は、「文化あるいは文明とは、知識、信念、芸術、道徳、法、慣習、その他の能力や習慣を含む複合物で、それらのものは、ある社会の一員としての人間によって独特のものにされるのである」と言った。つまり環境によって自分の文化が決まってしまうのである。

私の母国であるマレーシアは複雑な民族関係を抱えて成立した他民族・多言語国家であり、民族同士で微妙な均衡をとりながら理解していく必要がある。しかし、そういう環境に育ってきた自分にとって、異文化コミュニケーションというものは日常茶飯事である。自文化を尊重しながら、他文化を理解し尊重していくという文明のあり方はとても重要である。だから、多言語・多文化と多く触れ合える日本留学と比文への所属はとても嬉



異文化の交流

しい。現在、私たちの学術研究は、人間の普遍性を切り離しては行えないが、同時にその人間による文化の小さな違いも中心課題となっている。例えば、私の研究テーマである依

頼や謝罪という発話行為は同じ人間である限り、どの文化にも普遍的に存在し、同時にそれらの具体的な様子は文化による相違がある。それはたいへん興味深く、私自身研究する上で大切にしている視点である。

私の信仰は、人間は本質的に同じで、ただ文化の違いは小さな違いにすぎないというものである。コーランの中でアッラー(神)

がムスリムに対してだけではなく、人間全体に語りかけている次の言葉がある。

「人間たちよ、私は一人の男と一人の女からあなたがたを創り、種族と部族に分けた。これはあなたがたを互いに知り合うようにさせるためである。」(コーラン：部屋章13節)

同じ神様に人間が作られている以上、人間は本質的に同じであることは自然なことである。

例えば、人間はたとえ食生活に対する文化の違いがあっても、誰でも食べないとお腹がすく。人間はお葬式の仕方や来世などに対する考え方による文化の違いがあっても、誰でも絶対死ぬということは否定できない事実である。

人間は急に病気になったり、元気になったりして、自分の力でそもそも生死を決めることも知ることもできないが、医学的な成果を利用することである程度コントロールすることもできる。ずっと一年中夏である季節の変化が無い国から来た私には、日本の季節が身体に合わないことが多い。よく病気になって、日本の病院に行き、日本人の医者に見てもらった。患者や病気の種類をよく考えて見ると、違う文化、違う民族でも、かかる病気が一緒なら共通した治療法で治せるのである。医学の技術の進歩は時代によって違い、国によって医療技術のレベルは違う。しかし、医者も患者も古今東西同じ人間である。

また、嬉しい、寂しい、やる気の有無、好き嫌い、愛したい、愛されたい、尊敬したい、尊敬されたい、成功したい、怒り、配慮、懐かしいという精神的な気持ちは誰でも人間といえば間違いなく持っているものである。

文化や民族の特殊性と言うのは、小さなもので、互いに仲良くさせるための、まさに神様の奇跡である。また、同じ神様が創った人間という普遍性を大切に、他文化を尊重しようというのが神様によるメッセージなのだと思う。私はその信仰を自身の研究での大切な視点としたい。



日本で体験した異文化

モニカ ハムチュック
 Monica HAMCIUC

(日本語教育講座)



私は来日してからまもなく6年になるところだ。日本に初めて来る外国人の皆もきっとそうかと思うが、はじめはカルチャー・ショックが多少あった。日常生活に関するカルチャー・ショックはもちろん、また教育システムに関しても意外性を感じた。

しかし、文化の違いに魅力を感じ、時間が経つにつれ、日本の生活に慣れ、学校の教育システムにも慣れた。

日本で結婚し、子供も生まれた。これをきっかけに、日本や日本の社会に対する考え方が少しずつ変わり始めた。以前よりも日本の経済や政治や社会現象に関心を持つようになり、同時に不安も感じるようになった。心の中では私も日本の社会の一員となった。しかし、実際には日本に関して未だに知らないことが多すぎる。

異文化コミュニケーションということばは誰も最近良く耳にすることばであると思う。その内容も様々だ。

私にとっては、日本に来たことが異文化コミュニケーションへの第一歩だった。外国に出て、ある国を観光して、または留学して、しばらく住んで、その地域の言葉を覚えることが異文化コミュニケーションだと最近まで思っていた。しかし、それだけでは不十分だと今考えている。

今は、異文化コミュニケーションにはもう一つ大事な側面があることに気づいた。それは、積極的に他の文化に参加し、それを理解しようとする努力だ。つまり、「行ってみた」だけでは、異文化を知ることにならない。せっかく長い間ここにいる機会が与えられたのだから、それを利用しないと損になる。

とはいえ、一つの文化の全ての側面に触れ合うことも無理だ。日本を知るべく、私が選んだのは、日本の料理と和太鼓。どれ

も奥深くて、研究すればするほど面白さと難しさが増す。これらを研究して何を得たかという、私にとっては人生の中で必要不可欠の「食の知恵」と「遊ぶ余裕」、そしてこれらを通じた「人間と人間の繋がり」だ。

最近日本では、「若者が日本食離れをしている」と言われている。ところが同時に、世界中で「健康食」として注目を浴びている「和食」だが、私にとっても理想の食事だ。母国の料理と比べて実に手早く作れるし、健康にも良い。今や、我が家では毎日和食だ。これから日本を離れていっても我が家は和風料理中心の食卓になると思う。

一方和太鼓だが、特に太鼓を叩いて何かひらめいたと言うわけではないが、一週間の疲れやストレスぐらいは叩き落すことができる。それが音符にあわせてリズムになって、歌になるともう幸せだ。

一緒に太鼓の勉強を頑張っているおばさんたちとおしゃべりをするのも楽しくてしかたがない。最初は博多弁でしゃべられて、まったく理解ができなくて恥ずかしい思いをした。五年間も日本語の勉強してきたが、勘を働かせてもダメだった。自分も話せるようになると思わないが、前よりは少し分かるようになった気がする。



日本に来る留学生の皆は、毎日忙しい勉強や仕事に追われて、日本人との交流の場を作ることがなかなか難しいと思う。けれども、もし日本の文化を体験する機会があれば、逃さないで欲しい。そういった体験のお陰で自分の考え方や人生が変わるかもしれないからだ。

私の感じた日本人と中国人の違い

ちょう かい じょう
趙 海 城

(日本語教育講座)

日本と中国はよく「一衣帯水の隣邦」だと言われている。それは単なる地理的に近い位置関係にあることを指しているだけでなく、二千年以上の交流歴史を持つ国同士でもあることを意味していると私は理解している。両国は同じ儒教文化圏、漢字文化圏に属し、両国国民も皮膚の色や髪型などの外見は似通っている。しかし、実際に日本語を勉強し、日本で生活してみると、上の相似性とは裏腹に、日本語や中国語の漢字に違いが見られるばかりでなく、日本人と中国人の物の考え方や習慣、人との接し方など多岐にわたり違いが見られることが分かる。以下、私の見聞、感想に基づいて、その違いについて述べてみたい。

まず、呼称の違いについて見てみる。最初にアニメ『さざえさん』を見たとき、タラちゃんが自分のおじさん、おばさんに当たるカツオとワカメを「カツオにいちゃん、ワカメねえちゃん」と呼ぶのを聞いて耳を疑った覚えがある。なぜかという、それは中国語では失礼になることで、きちんと「舅舅(おじさん)、阿姨(おばさん)」と呼ばなければならないからである。親族呼称については、さらにいくつか相違点が見られる。日本語では自分の夫を「お父さん」、自分の妻を「お母さん」と呼ぶことはあるが、中国語ではお父さん、お母さんに当たる言い方は“爸爸”“妈妈”である。“爸爸”“妈妈”は夫婦間の呼び方として使えず、あくまでも自分の父親と母親のことを指す。中国語では夫婦間において直接名前で呼び合うか、あるいは夫のことを“孩子他爸”、妻のことを“孩子他妈”といった言い方で呼び、常に世代をはっきりさせる。また、中国語では、日本語のように子供を持つ父親が自分の父、母のことを「おじいさん、おばあさん」とは呼ばずに、あくまでも“爸爸(お父さん)”“妈妈(お母さん)”と呼ばなければならない。自分の息子を「お兄ちゃん」と呼ぶことも中国語では見られず、常に息子の名前で呼ぶのである。

次に挨拶の違いについて見てみる。外国人に中国語を教える際、“你好”を最初に教えるのが普通である。留学生も“你好”は中国人同士の日常挨拶でよく使われる表現と勘違いしがちである。しかし、中国人は挨拶用語として“你好”をそれほど頻繁に使わない。中国語の“你好”は初対面の人同士や久しぶりに会った時などに使われ、一種の他人行儀な挨拶用語で、

あまり人情味のない言葉だとも理解できる。したがって、親しい友人や同僚、家族、親類の間ではあまり使われない。中国人は日常生活において臨機応変に挨拶用語を使っている。例えば、“放学了?(授業終わりましたか)”“去上班啊(これからお仕事ですか)”“买菜去了?(野菜買いに行きましたね)”などのように、相手の様子、状態を見て、具体的に聞くのである。これらの挨拶用語は質問の形を取っているため、日本人から見て、プライバシー侵害だと思える人もいるかもしれない。しかし、これらの挨拶用語は決して相手に具体的な事実内容の返事を求めているわけではない。答えとしても“嗯(うん)”だけで良いのである。したがって、中国人はそれをプライバシー侵害だとは思わない。また、よく言われている“吃饭了吗(食事をとりましたか)”も一昔ほど言われなくなったものの、食事の時間前後での挨拶としてはまだよく使われている。答えとしては“还没呢(まだです)”“一会儿去(あとで行きます)”で結構である。相手はこちらを招待する気は全くないし、答える側もそれは単なる挨拶であることを分かりきっている。以上のように、中国人は基本的にその場その場において相手の状況を判断し、それに基づいて言葉を選び、挨拶用語としてやり取りするのである。そして、このようなその場限りの挨拶用語は“你好”より人情味があって、中国人に好まれているのである。



奈良の唐招提寺にて

一方、日本人は「こんにちは」「こんばんは」「おはようございます」「いただきます」「ごちそうさまでした」といった決まりきった挨拶用語を好むようである。これは日本人がお互いある程度

○○○ 特集：日本語教育の留学生

距離を置いて接し合うことから来ているのかもしれない。また、「きょうはお天気ですね」のように、日本人は日常挨拶としてよくお天気に触れるが、中国人にはあまり理解できない挨拶である。中国人は挨拶としてお天気に言及する習慣はないからである。逆に、「武士は食わねど高楊枝」という言い方があるように、中国人と違って、日本人は挨拶として「食事済ませましたか」などと聞かれるのが嫌で、「己の欲せざる所は人に施すなかれ」とあるように、自らもあまり言わないようである。

さらに、身体接触に関する違いであるが、日本人は「低接触文化」に属し、中国人と比べれば、他人と距離を置いて、できる限り触れない傾向がある。この六本松キャンパスでは学部の1、2年生をよく見かけるが、女子学生同士が手を繋いで歩くのはほとんど見られない。一方、中国の大学で女子学生が手を繋いで歩くのはよく見かけるのである。公共の場所で、日本人は他人に触れないように細心の注意を払っているように見受けられる。うっかり他人(の物)に触れたりするとすぐ謝るし、列を作る時もお互い距離を置いて並ぶのである。一方、中国人はお互いぶつかっても平気でなにも言わないことが多いし、列を作ってもお互いの距離が非常に短い。中国ではよく見られる風景であるが、道端で囲碁を打つ人、トランプで遊ぶ人の周りに何十人もの観戦者が集まっている。かれらははっきり見えるように我先にと輪の中に入ろうとする。身体接触などぜんぜん気にせず、むしろにぎやかさが好きで、好んでそういうところに集まってくる。このような光景は日本ではほとんど見られない。

また、他人の家に招待されて食事する時、中国人はおかずを少し残して、招待側が食べきれないほどいっぱい準備してくれたことを表わす。残らずに全部食べてしまうと招待側の準備不足で量が足りなかったことを意味し、招待者の面目をつぶしてしまう。でも、日本では中国と逆に、自分の分を全部食べないと料理がまずいといった印象を与え、失礼になるようである。

お土産をもらった時にも違いが見られる。日本人はお土産をもらってから、その場でお礼を言ったり、お電話やはがきでお礼を言ったりする。次に会う時も「この前どうも…」というふうに再度お礼の言葉を口にするのが普通のものである。また、日本人

はお土産などをもらってから、その場であるいは時間があまり経たないうちに何らかの形で返すのが普通のものである。お客さんが持ってきたお土産をその場ですぐ開けて、自分の気に合うなど嬉しい気持ちを相手に伝えることがある。お菓子であれば、「御持たせで失礼ですが…」と言いながら、お客さんと一緒に食べたりすることもよくあるようである。一方、中国人はお土産などをもらった時、その場で感謝の意を表すが、それで終わりにして、その後会っても再び感謝の言葉を口にするのは少ない。中国人はすぐ返礼する習慣もあまりなく、相手がいつか何かあった時、自分のできる範囲で助けてあげるといった形でその情を返すことが多い。お土産を受け取ってから、その場で開けて、褒めたり、食べ物であれば食べたりすることはほとんどない。中国人は受け取るのは気持ちであって、物ではないという意識が働いているからかもしれない。

食事所の看板などからも中国人と日本人のお好みの違いが見られる。中国人はどちらかという目立つのが好きなようである。看板を大きく、ピカピカにして、店内も大理石などでピカピカに装飾するのが普通である。看板でお客さんを引き寄せる狙いがあるようである。それとは対照的に、日本のお店は地味な看板を掲げて、店内も木材などの天然材料を利用し、独特な雰囲気を出すところが多いような気がする。これも日本と中国の文化の差の現れであるかもしれない。日本のそういうお店に行くと、私はなんとなく自分なりの「わび、さび」「もののあわれ」を感じることもある。

以上、私の感じた日本人と中国人の人の接し方、物の考え方、習慣などの違いについて少し見てきた。むろん、以上述べたことはあくまでも私の感じた一般傾向であり、例外も多々あると思われる。また、これ以外にも日本人と中国人の違いが多く存在すると思う。

日本に来て4年の月日が経ったが、月日のおかげで、自分の殻に閉じこもりがちな私もだんだん日本人との付き合い方が分かるようになってきたような気がする。これからも違いを見極める目を保ちながら、日本人社会に溶け込んでいきたい。

留学生と日本語教育

許 明 子

(筑波大学人文社会科学研究所・留学生センター)

「日本語教育」という専門分野は近年かなり認知されるようになってきており、「日本語教育学」という専門分野も頻繁に聞かれるようになりました。しかし、私が14年前に来日し、日本語教育について学び始めた頃は、「日本語」と「国語」の違いについて聞かれることも多くありました。近年の日本語教育ブームは、留学生を含む多くの外国人が日本に滞在し、その外国人等に対する日本語教育の必要性が増してきているからではないでしょうか。日本政府が1983年に打ち出した「留学生10万人受け入れ計画」が2003年5月に達成され、現在も多くの留学生が日本で学んでおり、日本のグローバル化がいっそう進んでいるのも日本語教育の必要性が高まる一因といえるでしょう。日本語教育の専門分野といえば、まず「留学生に日本語を教える」ということが考えられますが、実際に教育現場で外国人等に日本語を教えることだけではなく、日本語学、対照言語学、日本語教授法、日本事情、日本語史なども日本語教育学に含まれ、言語学と教育学に跨る日本語全般に関する研究分野で、研究成果を教育現場に直接的に応用できる実践的な学問といえます。

私は現在、筑波大学留学生センターで留学生に日本語を教えるとともに、将来日本語教育に携わることを目指している大学院生を指導していますが、私自身も日本語教育を専門に勉強する留学生の一人でした。平成6年に比文の1期生として入学し、修士課程、博士後期課程を修了し、志学館大学法学部講師を経て現在は筑波大学人文社会科学研究所及び留学生センターで日本語を教えています。

しかし、私のような外国人が留学生に日本語を教えるというのを聞いた人は、まず「外国人が外国人に日本語を教えるんですか?」「韓国人に日本語を教えているんですか?」と質問してきます。留学生に日本語を教えるという仕事は日本語を母語とする日本人ができること、という考え方が一般的だと思いますが、元留学生だった人が日本語教育に携わるケースが年々増えています。近年、日本語教育を学ぶ学生は日本人学生のみならず留学生も増加の傾向にあり、ノンネイティブ日本語教師は益々増える傾向があると思います。

日本語を母語としない外国人日本語教師は色々な面で、元

学習者としての特徴を生かすことができます。まず、日本語を外国語として学んだ経験から日本語を客観的に分析する観点を養い、教育現場で効率的な学び方を実践的に伝えることが可能となります。また、教師の母語と日本語を比較し、日本語の学習に与える母語の影響、干渉について効果的な日本語の指導法が提案できるのです。日本語を第2外国語として学習した際に得た経験は、元留学生ならではの教室運営を可能にする糧となるのです。

また、日本で外国人として生活を営む経験は、留学生の日常生活の問題点、困難を感じる点、日本文化への理解および接し方など、様々な点で自らの経験を留学生の生活にアドバイスすることができるのです。日本人母語話者は何気なく日常的に使っている日本語、毎日普通に過ごしている日本の日常生活が、留学生にとっては全てが未知の世界なのです。このような点でノンネイティブ日本語教師は日本語教育の世界において新たな世界を開く存在になれるのです。

現在は、日本国内でノンネイティブ日本語教師が日本語教育に従事することは希なケースですが、海外の日本語教育に関してはいえば、日本人よりもはるかに多いノンネイティブ日本語教師が世界各国で日本語を教えています。たとえば、世界で最も日本語学習者が多いといわれる韓国では、中等教育機関及び大学で約80万人の日本語学習者がいるといわれていますが、日本語を教えている先生のほとんどが韓国人なのです。中国、オーストラリアなどにおいてもたくさんのノンネイティブ教師が日本語教育の現場で教鞭をとっており、日本人教師と協力しながら日本語を教えています。

しかし、日本語を母語としない外国人が日本語を学び、また教える立場に立つということは決して容易なことではありません。生まれたときから母語として日本語を習得し、日常生活の中で自然に学んできた日本語母語話者とは言語使用の背景が異なるためです。だからこそ、日本語教育を学ぶ留学生は母語と日本語を含めた「言葉」そのものに敏感になり、経験的に体得した日本語学習の難しさを客観的に分析し、教育現場への応用について研究するという姿勢が求められるのだと思います。私は2005年から日本語教育の新たな試みとして、韓国の現

○○○ 特集：日本語教育の留学生

職ノンネイティブ日本語教師を対象に日本語再研修プログラムをコーディネートすることになりました。海外における日本語教師を支援するプログラムの一環として、日本語のブラッシュアップ、教授法および教材の開発、最新の日本事情を取り入れた授業運営等について研修を行いました。

韓国の現職日本語教師は私と同じく、日本語を第2外国語として学び、日本語教育現場で教鞭をとっているわけですから、私の研究・教育経歴は大きな自信と勇気を与えたようです。ノンネイティブ日本語教師として誇りを持つとともに、日本語力の向上、日本の様々な分野について理解を深める努力を続けなければならないことを強く感じていました。このように、私の日本語学習者としての経験と日本語教育研究者としての経験は、単に留学生に日本語を教えることだけでなく、日本語教育の様々な分野で生かすことができるので、誇りを感じています。

現在は日本国内における日本語教育関係者は日本語を母語とする人が中心になっていますが、年々留学生の日本語教育研究者が増加しており、今後とも日本国内外で日本語教育に従事する研究者は増えることでしょう。日本語母語話者と留学生がお互いに学びあい、刺激しあうことで日本語に関する理解が深まり、教育現場への応用も幅広いものになると思います。

日本語教育を学ぶ留学生はもちろん日本語を母語とする日本人も「日本語」という言語を見つめ直し、お互いの観点を共有し、両者の協力関係をさらに緊密なものにしていきたいと思います。

現在、多くの留学生が日本語教育を学び、研究活動を行っています。日本国内外でさらに活躍の場が増えることを願っています。そして、私のような元留学生が日本国内で日本語教育に携わり、日本語研究者として研究を行っていることが少しでも勇気を与え、希望を与えることができれば幸いに思います。



2005年前期に担当した日本語研修生の東京見学プロジェクト：浅草にて。筆者は最前列左から1番目

山と松と私

キム ヨン ジン
金 映 辰

(地球環境保全講座)

私は山登りが大好きだ。韓国にいる時は毎週山に行ったほどだ。韓国は花崗岩の侵食によってできた残丘が多いので奇岩怪石の岩山が綺麗。北朝鮮にある金剛山、韓国の雪嶽山はこの代表的な山で、人々に愛されている。花崗岩質の痩せた土地、乾燥気候下ではマツがよく育つ。韓国はどの山に行ってもアカマツが堂々と立っている。溪谷の奇岩怪石の所にマツが立っていて霧がかかっていると、武陵桃源にいるような錯覚に陥る。まるで一枚の山水画を見ているようだ。この山の魅力に嵌まって大学の時から山岳部に入って、時間さえあれば山に行っていた。山の景色を眺めながら一汗かいて頂上まで登って、弁当を食べて降りてくる。単純なことだけドストレス解消には一番いい方法だと思う。

会社に入った後も山に通い続けた。山に行くために会社に通うような感じだった。入社5年目の時、アジアの経済金融危機の波が韓国にも押し寄せて来た。材料工学を勉強して専門を生かして金属会社に入っていたが、会社を辞めざるを得なかった時はショックだった。山に入って山人になろうとも思ったが、現代生活の便利さに慣れていたので文明の利器が届かない不便な生活を一生やるのはさすがに自信がなかった。たまに山に行って現実の生活に戻ってくるのはいいけど、獣みたいに山でずっと暮らすのは諦めて、日本語の勉強を始めた。会社で担当した設備が日本の日立製の電気炉だったのでマニュアルを読むために始めたのがきっかけだった。

6ヶ月ぐらい一所懸命勉強したけど、いくら経ってもうまくならないので本場の日本に行って学ぼうと決心した。1年間東京の日本語学校に通いながら勉強したが、やっぱり1年では足りなかった。1年間でどうにかなると思ったけど、早口の日本語が聞き取れなかった。日本語をマスターすると決心した以上そのまま帰らなかつたので、何年がかかってもやって見せると思った。もちろん東京に住んでいた頃も山に行きたい気持ちの隅にいつもあったので、ある日一人で富士山の頂上まで登った。韓国には2000mを越える山がないので気圧の差を感じることはあまりなかったが、富士山ではお菓子の袋がパンパンに膨らむ不思議な経験をした。3000mを越える山は初めてだったので、頂上に着いた時は何とも言えない気持ちだった。

就職のことも考えて長崎国際大学の国際観光学科に入学した。ガイド資格を取って旅行会社に入るつもりだった。3年の時偶然屋久島に行く機会があった。それもヨットで。知り合いの方に乗せてもらって、ハウステンボスから屋久島の宮之浦港まで、片道30時間の長旅だった。普通の交通手段では味わうことの出来ないすばらしい体験をした。夜空にきらきら光る星と船によってできた波の泡に幻想的な色で発光する夜光虫の美しさが頭の中に焼き付かれて今もたまに夢に出てくる。



屋久島と一緒にとった一枚

屋久島では樹齢千年以上の杉を屋久杉、それ以下を「小杉」と呼んでいる。2000mの標高差にわたる連続的な植物の変化とともに、人、森、動物が結びつき、ひとつの命として息づいている。屋久島の森は伐採など人間の影響を強く受けながらも、切り株更新などで森林の生態系が受け継がれていることが評価され世界遺産に登録されている。樹齢7200年と推定される伝説の巨木・縄文杉をはじめ、宮之浦岳で数千年の間生き続けている屋久杉の森を見て自然のすばらしさに感動した。そして自然環境保全の大切さに気づいて大学院に進学してもっと勉強することを決めた。

インターネットで情報を調べている時ピッタリの講座があったので、九州大学大学院比較社会文化学府に入学した。現在熱帯農学研究センターの矢幡先生の下で研究をしている。樹木のことは素人だったので何をどこから勉強すればいいかわからなかった。先生から「松の生理生態と樹形を調べたらどう」と言われた時、真っ暗な闇に一筋の光が見えたように感じた。

韓国の海岸も日本と同様白砂青松の綺麗な景観で人々に親しまれてきた。また松の葉と材木はいい燃料にもなるし、落葉樹が多い韓国では四季青々としているので、気品ある木として愛されてきた。こういう松を研究するのは意味あることだと思われた。



天然記念物・正二品松

韓国には松に関わった物語がたくさんある。写真の松は樹齢が600年以上と推定される天然記念物である。この松の名前は正二品松で、官位を持っていることでも有名である。1464年、朝鮮王朝第4代の王様世祖が皮膚病を治すために温泉に行く途中、王様が乗った御輿の上の部分に枝に引っ掛かりそうだったので心配していたら、松が自分の枝を上げて通りやすくしてあげたという。そして王様がソウルに帰る時はいきなりの夕立で困っていたところ、雨を避ける場所にもなったのでありがたく思って正二品（今の長官に当たる）の官位を与えたという伝説がある。食べ物、建築材、燃料など松は韓国人の生活と密接な関係にあった。その上松は、防潮・防風の機能も持っているので大事にされて来た。しかし近年開発の波と材線虫で危機的な状況に陥っているので、松林をもっと効率的に保全する方法を探りたいと思って研究テーマに選んだ。

クロマツは塩害に強く砂浜でも育つため、各地の海岸に植えられ防砂林として維持されてきた。これらは海岸の景観を構成する重要な要素の一つとなっており、マツを主体とした著名な景勝地が多い。しかし海岸マツ林の多くは防潮を目的として高密度に植林された人工林であるため、光不足によって枝葉が枯れ上がり、樹冠は上方に偏寄している。林間でのレクリエーション活動に利用するには高密度のため空間が確保しにくく、

間伐が遅れると樹冠量が不足して防潮機能が損なわれる。そのため林内活動を想定した新しい密度管理が必要である。一般に、海岸林造成のためのクロマツの植栽密度は10000本/haと高密度である。その理由は、いち早く樹冠閉鎖をさせて飛砂防備や防潮機能を早期に発揮するためである。しかし、生育初期に過度の枯損が生じない場合には、8～10年でその林相は過密になる。そのまま放置すれば高密度による光量の減少によって、下層の枝葉が枯れて個々の林木の肥大成長が抑制され、気象害に対して弱い林相が形成される。その結果、飛砂防止や防潮機能の発揮が困難になる恐れがある。

そこで私は次のことを目的として修士論文の研究をすることにした。高密度に植栽されたクロマツ林内の光環境と枝葉の枯れとの関係を明らかにし、葉が枯れずに続けて光合成を行い肥大成長に貢献できる相対照度の下限を求めて間伐の時期を決め、密度管理に利用することである。従来の松林の密度管理は密度管理図と相対幹距を利用して行われた。それによって間伐をした時、下方まで葉が付くかどうかは分からないので、林床の光強度を利用した密度管理を試みている。

今後の目標は博士課程まで勉強して研究者になることだ。大学に通う時には勉強があまり好きではなかったが、熱帯農学研究センターで研究しているうちに樹木の生理生態を少しずつ知って行くのがだんだん面白くなってきた。今私達の研究室ではバングラデッシュからの留学生アピアさん（博士1年）と浦谷さん（修士2年）と一緒に勉強している。違う文化、宗教、言語、食習慣などを持っている人達が集まって研究しているのでいろんな面で面白い。昼休みの時間には自分の国の話や日本との違いを話し合うのが楽しい。英語は得意ではないので、英語の論文を読む時は一苦勞している。植物の名前も殆ど知らないで、いい論文を読んでもイメージが湧かない。やるべきことがあり過ぎて頭が痛いけど、山に登る気持ちでコツコツやっつけている。本当に頭が痛くなってたまらない時には、山に行ってストレスを発散して降りてくれば良いと思う。幸い九州にはいい山がたくさんあるので、研究に疲れて頭がおかしくなる心配は要らないと思う。皆さんも何かのことで行き詰った時は山に行くことをお勧めします。

学芸員と学生の二足の草鞋

わらじ

池上 直樹

(地球自然環境講座)

恐竜は博物館の人気者である。博物館ではじめて恐竜と出会い、その不思議さに魅了される人も多いだろう。私も、恐竜にとりつかれた人間のひとりではあるが、恐竜との出会いは少し変わっていた。私が恐竜とはじめて出会った場所は博物館でもデパートの催事場でもなかった。学生時代、指導教官から卒業研究の調査地域として与えられた山の中であった。ハンマーでたたき割った岩の中から偶然顔を出した一本の骨の化石。これが、私が生まれてはじめて見た恐竜の化石であった。

熊本県の中央部に御船町という小さい町があり、国内有数の恐竜化石産出地として知られている。かつては鉄道がはしり、町の中心を流れる御船川沿いには白壁造りの酒蔵が建ち並んでいたという。地理的には熊本平野の南東側の縁にあたり、中山間地域が大部分を占める。このあたり一帯には御船層群という白亜紀の地層が広く分布しており、以前から日本初の肉食恐竜化石の産出地として知られていた。今でこそ、日本各地で恐竜化石が発見されるようになったが、化石の産出が続いている地域はほとんどない。しかし、御船町では今でも調査がおこなわれており、新たな発見も続いている。

このように恐竜化石研究には恵まれた場所に、「御船町恐竜博物館」という町立の小さな博物館がある。恐竜をテーマとして調査・研究・資料収集・収蔵・展示・情報発信・教育活動をおこなう、非常にシンプルな博物館である。もともと古い武道館を再利用したもので、外観は来館者に入館を躊躇させるくらい博物館らしくない。大きい建物に囲まれているため、「わかりにくい!前を通っても気づかなかった!」とお叱りを受けることも以前はよくあった。しかし、玄関の前にティラノサウルスの復元模型をおいたことで、ずいぶん苦情は減った。この番犬(番恐竜?)のように置かれた模型は、恐竜博物館の看板としても、展示の一部としても非常に役立っている。大きな足にしがみつく子どもたちの姿もほほえましいが、ティラノサウルスの下で、手が小さいだの顔がでかいだのとディスカッションを始める部活動帰りの中学生たちの姿もなかなか良い。

御船町恐竜博物館の活動の基礎となっているものは、恐竜に関する調査・研究である。フィールドにある博物館として、野外調査は重要な活動のひとつに位置づけられている。調査と



御船町恐竜博物館と玄関前のティラノサウルスの実物大模型

いっても、藪をかきわける踏査、汗まみれになりながら削岩機と格闘する発掘調査、鏡下で岩石を削る肩のこる剖出整形作業と、きわめてローテクな作業ばかりであるが、日本の恐竜を明らかにするためには避けて通ることができない作業である。

博物館での日常は、このようにして集めた化石の研究に没頭できるという夢のような状況ではない。中九州一円から授業の一環として来館する小・中学生への対応や出前授業の準備などひっきりなしである。それでも、時間を見つけて、スケッチや計測をおこなって化石の特徴を整理し、文献を傍らに積んで化石を鑑定する作業をおこなっている。サンプリング(発掘)と試料の処理(剖出)がようやく終わって、いよいよ分析といったところであろうか。しかし、文献に詳細な記載がなく、判断できないこともよくある。いくら骨を眺めていてもわからないので、最終的には海外の博物館や大学をまわって、標本を比較しなければならなくなる。実際に標本を観察すると、文献から得ていたイメージが違っていることに気づくこともある。また、良い標本を多く観察することによって、断片的な化石を鑑定する力がついていくのがわかる。

これまでに御船層群から見つかった脊椎動物化石は、恐竜だけではないが、とにかく数は多く、軽く1000点は超えている。このように小さい化石を大量に産出する化石産地はマイクロサイトとよばれる。産出する化石の中には保存状態の良いものもあれば、明らかに堆積前に破壊されているものもある。骨の化石は関節が外れて遊離しており、それぞれの骨が同一個体か